

# 幼児の言語習得と家庭環境

大久保 愛

文学 49 (10)

114-122  
1981  
岩波書店

## 1 就学前幼児の二例

数年前、お母さん方に、幼稚園、保育園の5歳児クラスに通うわが子の一日のことばその他を、約12時間ほど収録してもらったことがある。8人というわずかな人数であったが、そのうち一番言葉の多い女兒と、一番少ない女兒を最初の研究対象として分析し、発表した(1)。なぜ、このような差が出てくるかに興味を持ったからである。この二例から、原因がわかるとは思えなかったが、家庭環境とことばについて考えられるところがあつた。人間はことばを使ってしか自分の考えを表出できないとすれば、ことばを、場面にふさわしく使用することが、社会生活をする上で求められる。それは家庭で、幼児期に学ぶのである。

A児、B児(仮名)として、まず、調査結果をあげる。A児の全使用語(助詞・助動詞を除く)数は、一三、七二三語、B児は、四、七四三語で、語の異なりは、A児二、二〇四語、B児九四〇語で、二人が共通に使用した語は、異なり四六五語であつた。この共通使用語

で、A児は21%、B児は50%をまかなっていて、A児は異なった語をB児より多く使用しているのである。また、この共通使用語を何回も使つて、A児は70%、B児は80%もまかなっていることがわかつた。共通使用語は基本的な語といえる語群なのである。次に品詞別で二児の違いを見ると、A児は、名詞、音まね語(擬音語)、副詞、接続詞をB児より多く用い、B児は、名詞と音まね語が少なく、代名詞、感動詞、数詞をたびたび用いているのである。これだけからも、A児の話したことばの文には長いのもあつて、楽しいのではないかと、B児のそれは、単純で、代名詞が多いのではないかと推測されるのである。次に、A児のみ、B児のみ使用の語を少しあげてみよう。

A児——名詞には、漢語複合名詞等による文章語や本人による創作語が見られる。

「アンバイ」「イドウ(移動)」「コンチユウ」「セツケイズ」「セツメイ」「ハレツ」とか、「カナシミ」「タノシミ」「ツカレ」「トドメ(止)」「スミカ」「マキ(巻)」「ワク(枠)」などは文章語、「アルキコ

ース」「イキミチ」「ウシギユウニユウ」「チュウチュウゴッコ」「ヤクソクハズレ」などは創作語である。

副詞も同じく、文章語をよく使い、擬音語も見られる。「イカガ」「イチオウ」「イマニ」「シヨウシヨウ」「ダイタイ」「タダ」「タマニ」「トリアエズ」「ナルホド」「ヒトマズ」「マサカ」「マルデ」などは文章語。擬音語としては、擬態語も見られる。「サット」「ジロツト」「ヒョイト」「ウロウロ」「ソロゾロ」「ムズムズ」。

B児のみの使用語は、「イリグチ」「イレカタ」「エガオ」「コウタイ」「シツカク」「ジョウガイ」「ハイケン」などと漢語等による複合名詞も見られるが、「オタンチン」「ブツケッコ」などの俗語もある。副詞では、「オモイッキリ」「ゲンキヨク」「ジキニ」「ズイブン」「コナゴナ」「サツサト」「ポロポロ」などで語の種類は少ない。(これらの語を、二児が全く使わないというものではなく、この調査ではこのようだったというに過ぎないが、違いの例としてあげておいた。)

## 2 二児のことば環境

この調査は家庭環境調査ではないが、一日の家庭でのことばの生活があまり録音されているので、家庭環境の一部である親の、子どもとの相互交渉が推察されるのである。これから述べることは、収録された記録を通してのわたしの推測である。

親に録音を依頼するとともに、わたし自身も、子どもを知りたいので面接して、家庭の人員構成、家での遊び、読書やテレビ、友だち関係などについて問答したのも収録した。その中から例をあげ

A児の場合——お母さんがお話をしてくれたり、絵本などを読んでくれるかという質問に対して、「アル」と言つて71文節の話をしてくれた。半分ほどあげると次のようである。

ハジメネ ウラシマタロウテ イウ オトコノコガネ オトコノコジヤ ナイ オトウサンノ ヒトガ スンデ イタノ。ソレデネ イツモ ナンカネ フネニ ノツテ サカナ ツカマエタリ シテルノネ。ソレデ アルヒ カメガネ リユウグウジョウテ ユウ トコロカラネ ヤツテキテネ モシモシウラシマサン リユウグウジョウヘ ユキマセンカッテ ユツテネ イッシヨニ イクツテ ユツテネ オトヒメサマト イッシヨニ タノシク ゴチソウ シタリ シテネ サンジュウネンカンゴライソコデ アソンデカラ マタ カエツテキテソイデ チイサナ ツヅララ モラッタノ。(略)

それからまた、「アト トケイノ コト ユイタインダナ」ということなので話を聞いた。

アノネ ハジメノウチ オコラレテバックシイタケドネ ウント イチハ ゴフントカ イワレテルケド オボエタノ。ゴ、ジュウ、ジュウゴ、ニジュウ、ニジュウゴ、サンジュウ、サンジュウゴ、ヨンジュウ、ヨンジュウゴ、ゴジュウ、ゴジュウゴ、ロクジュウ。

これは「オカアサン」から教わったそう、今なんじかとのその場でのわたしの質問に対して、壁にかかっている時計をみながら「イマハネ ヨジネ ジュッパン」と正しく答えた。

B児の場合——テレビの題名をあげ、「ヨクミテル」というので内容を聞くとしたが「ワカンナイ」という。ついで親が本を読ん

でくれるかと聞いたら「オウチデ ヒトリデ ゴホン ヨンデ ミテル」と言う。「ミニクイアヒルノコ」だと言う。

ミニクイコノ タマゴ ウンデネ ヤット ワレタカラネ  
ソシタラネ ミニクイアヒルノコガ デテキテネ ソシテネ  
ウチノコジヤ ナイチユウカラネ カワニネ オボレサシチャ  
ツテネ オヨゲタカラ ウチノコニ シタノ。

よく知っているねとほめると、「ムズカシイノモアルケドネ」と言い、「Bチャン ホントハ カンジ シッテンダケドナー」と言い、「ジヤ ナマエ カイテ アゲヨウカ」と言って、ひらがなで姓名を書いちゃった。小学校に通っている兄がいるので「カンジ」ということばが出たようだが、どうもひらがな文字のことらしくかった。就学前になると、文字や数を覚えることが、現代の幼児には要求されていることが窺えるのである。

わたしは、幼児期での文字教育の位置づけを次のように考えている。家庭に小学校に通う兄や姉がいて、机に向って文字を書くという雰囲気があると、弟妹は3、4歳のころから真似て書きはじめ、第一子より文字を覚えるのが早いようである。もちろん読みはじめ、まっている。第一子は、そう簡単にはいかない場合もあるようだが、子どもの文字を知りたいという好奇心を大切に、自発性を疎びたいと思う。その時を文字を教えるきっかけにするのは望ましいことである。しかし、文字を知ることとは、五十音の文字の読み書きができるだけのことではないのである。書かれている内容の理解、書く中味を持っていなければならぬ。文字の読み書きができるためには、字を知らねばならないのももちろんであるが、ある程度の語を蓄積して、適切な語順で表現できることや、それぞれの語

を明確に発音することもできなければならないのである。もの名前を知り、適切に表現するために、豊かな経験からことばの意味を知らなければならぬ。これらの経験を得るためには、間接経験である読書やテレビも有効であるが、幼児の場合は、親との対話によって得られる耳学問が大きい。親と子でごっこ遊びをするとか、読書やテレビにも親が介在することによって、子どもの経験が豊かになるのである。文字を書くことを強制するよりも、親子が同じ経験(ともに買い物する、散歩に出かけるでもよいし、他人との応対でもよい)をしたときの親の対応の仕方、ことばづかいを子どもは学ぶのである。四六時中母子がともに生活することによって、ことばの外延や内包を学習するのである。ここで学んだ経験が、文字を覚えたあとで、読み書く時に、まわり道のようにも効果を発揮するのである。それなしに文字を覚えても、形だけで内容が乏しいということになる。話しことば能力は、幼児期にその基礎が家庭で作られるのだから、一生、肉体の一部となって人格を形成することは先生となる親、特に母親のことばづかいとか、ことばの環境づくりが大切になる。文字の読み書きのみが先行する現代の幼児言語の教育を嘆きたいのである。

A児は、後に例をあげるが、母にさそわれて、起床後、アパートの窓から見る「霧」を話題にしたり、母に聞かれて自分の創作話を使ったり、弟や友だちとお医者さんごっこで遊んだり、人形や粘土を兄がおしゃべりのせい、家庭では無口で、会話は、翌日必要なら、園に持っていく品物や服装について語るといふふうで、母親からも、野球ゲームやトランプをしようという語りかけはあっても、「Bち

やんの作ったお話を聞かせて」というさそいは全くないのである。

A児の母親のことば——A児が起き出した時、お外みてごらん

お外 ①ミラレナイヨ ②なんだと思う? ③キリ ④あら知っているの? ⑤イチゴウトウトカネ トオイ トコロハ アンマリ ミエナイ。キリネ、ワアー キリナンテ ハジメテ。

一日がこのようにしてはじまっている。

⑦ネ キリ ナオツテキタデシヨ ⑧うん晴れてきたわね ⑨キント モウ ドンドン。ヨカッタ。ドウシテ キリノトキハ ジドウシヤモ ミンナ ビシヨヌレナノ? ホラアソコ ミンナ ヌレテル。⑩雨降ったんじやない、昨日。

次は夕食のとき、父親が参加。

⑪オトウサン キリガサ ウント ヤッタツテコト ワカル?

キリ ⑫きり? ⑬ウン キョウ ヤッタノネ ⑭やったとは言わない。霧がかかったの ⑮朝行く時? ⑯ウウン ワタシガ オキメ、⑰朝起きた時ね ⑱ウウン ⑲ふうん 見えなかったの? ⑳ウウン ハチゴウトウハネ ㉑ふうん ㉒ヨングウトウハ ミエタケド

⑫きりっていうんじやなくてきり。 ⑬キリ! ⑭うん  
話題が知的であり、霧のアクセントのましがいの訂正も行なわれている。

B児の母親のことば——B児が無口のせいもあって、母親による日常生活のごとが多い。

・お豆腐食べなさい。これお豆腐。また! 明日のお弁当作らないわよ

・だからお母さんに貸しなさいって言ったでしょ  
・またはじまったあ、どうしてこんなことやるの! ちゃんとなおしなさい!

・ほーら あけたらあけっぱなし、どうして開めることがわからないの?

・そんなとこ置いておくからいけないんじゃない  
傍線のような命令やごこと、言わでものことばが多い。もっと楽しい子どもとの話題がないものかと思わせる。

この二児のもう一つの違いは、A児にはいわゆる「幼稚園こと

ケーテ・シルバー著／前原 寿訳

# ペスタロッツチー

人間と事業

A5判上製函入・四〇〇頁 定価三九〇〇円

ペスタロッツチーの生涯は、愛と真実に生きた一人の人間の魅力溢れるドラマである。ペスタロッツチーの全体的な人間像と、政治・経済・宗教・道徳・教育等の多方面に亘る彼の思索および実践の全貌を、多くの新資料を含む原典の追究に基づいて再現する。今日の混迷した教育状況の打開に本書は多くの示唆をあたえるであろう。



岩波書店

東京・千代田一ツ橋2-5-5

ば」が見られたのである。

オギユウニユウ、オセナカ、オハジマリ、オゲッシャ

幼稚園で先生が「いい語を使おうとして」「お」の過度につくことばを使うために、子どもも使うようになった語である。一方B児は、友だちに男児が多いせい、あるいは環境のせい、か次のようなことばが見られた。

ザアマミロ、スゲエ、チキシヨウ、という乱暴なことばや、「これ」を「コイデ」、「すみません」を「スイマセン」、「ゼンイン」を「ゼイン」と傍点のようになまって言う言い方である。

映画「マイ・フェア・レディ」の花売娘イライザもこんなことばを使っていて、ヒギンス先生になおされレディになっていく、イギリスでのお話であるが(原作はバーナード・ショウの「ビッグマリオン」)、東京にも存在していることを知ることができたのである。しかし、これらは、小学校に入学し、文字ことばを学ぶことによつて、次第に訂正されていくので、わたしはそう重要な問題と思つてはいないが、幼児期にある例として述べた。

以上述べてきたところは、幼児期の到達点である小学校就学前の幼児のことばが、家庭でのことは環境によつて差が出てくる二例である。ここから言える指導のしかたを次に五つほどあげる。

- ①両親に話しことばを大切にすることを意識が必要であること
- ②家庭での会話を大切に、要求や命令語の多い日常生活語ばかりでなく、自然、社会、精神、等の文化的話題を会話のテーマに持つようにすること
- ③「語文や代名詞のみで話さないで、「だれが」「なにを」「どこで」「いつ」「どんなふう」「する」かと、文として話すように心が

こにあげるのは1歳から2歳までの期間である。

前言語期から1歳前後にかけての研究は、アメリカでも、母子関係の大切さの認識のもとに心理学者の間で盛んになっているようである(5)。

次に実例をあげながら見ていくことにする。

①禁止や命令——「もうさわらないで、そこ熱い熱いよ(トースター)」、「たたみの上に書いちゃいけないのよ」のように行動の禁止や命令が多い。その時、「何を」「どこに」という禁止するものや場所の名前を言うことが大切。ただ「だめ」というだけではことば指導にならない。また、発展して、「ひとつずつ取りなさい」と方法も教えている。

②状況説明をする——①の禁止や命令の場合も状況説明をすることが大切だったが、どんな場合もだまって行為するのでなく、行為とともにことばを使うこと。「お口に持って行ってあげますよ」「これ全部干してからね」「ほらバンザイして、ちゃんとぬげたでしょ」「と、理由をあげたり、状況を説明したり、着服の仕方を教えている。

ける。そのためには、適切なことばや修飾語を用いるようにすること

④あかるいはっきりした発音を心がけること

⑤ゆたかな話題が話せるためには、読書も大事だし、子どもとともに絵本・童話を読み、同じ経験を持つようにすること

### 3 幼児初期のことばと母親

幼児期と言っても、これまで述べた小学校入学前のころもあるが、誕生のころの幼児、まさに言語を習得しようとしているころもある。後者の幼児はどのようにしてことばを習得するのであるか。わたしは、こちらも、録音機を使ってことばを集め、分析している。幼児がことばを習得する順序と年齢について、個人差はあるが大体の標準的なことがわかったのである(6)。

子どもの認知能力の発達と、親との相互交渉によつて、子どもはことばを覚えていくという母子相互関係の視点からのことばの調査は、まだ、日本では少ないようである(3)。わたしは、研究の土台となる生の資料を求めたいと、母親の協力を得て、一男児の1歳前後から4歳までのことばと、それにかかわる母親のことばを同時に録音し、文字化した。一つは、毎月2時間ずつ随時録音するというもの、他は、誕生日当日の一日の録音である。この一日調査のものは、本年6月に刊行された(4)。

これら資料を用いて、幼児がことばを獲得していく上で、母親のことばがどんな役割をしているかを調べた。一児の母親の例なので一般化できるかどうかかわからないが、分析した結果を述べる。子どもの発達にしたがって親の対応も変化するのはもちろんで、こ

子どもが質問をしているわけでもないのに、子どもの視線がそちらに行くと、「それプーさんね」「はい、ウマンマよ」とことばで命名する。その他、「外で遊んだからのどが乾いたのね」「キリンちゃん(ビニールの玩具)持ってきてくれたの」「ねむくなつたのね。プーさん(玩具)と二人でねころんで」「子どもの行動を見守って、ことばで話しかけている。「うるさい」などと言わないのは、育つてほしいという母親の願望の自然のあらわれなのだろう。「鳩のデデッポッポがきこえたでしょ」なども言う。子どもは、食べものを与えてもくれ、なんでもしてくれる母親のことばに耳を傾け、目で見て、頭を働かせることによつて、ものの名前や、生活の知恵、きまり、まわりのたがはずまいなどを学んでいくのである。

③子どものことばに対する応答——子どもの質問や叙述に対して返答する場合も同じである。叙述と言つても1歳ごろは、「ンーン」と指さして聞く程度であるが、子どもの身振りや推察して、「これはバス」と直ちに返答する。指さし以外では、ほとんど単語一語の文であるが、その時は前後の文脈を補充したり、まちがいを訂正し

# ソシユールの思想

丸山圭三郎著

A5並製輸入面〇八頁 定価三六〇〇円

20世紀後半の人間諸科学の方法論と認識に多大な影響を与えた近代言語学の父ソシユール。初公開の資料によつて原初の記号理論の思想の本質を明らかにする。ソシユール研究の決定版!

増刷 ソシユール一般言語学講義 小林英夫訳

出来 ソシユール

J・カラー / 川本茂雄訳

【岩波現代選書12】

A5判・定価二五〇〇円

新B6判・定価一二〇〇円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋2-5-5

て、正しい語、あるいは文にして返答する。

・④クック ⑥くっくはいて行きたいの？ 今暑いわよ、こんなかんかん照りで、お日様 ⑦ンンアー ⑧じゃ もうちよっとして行きましよう ⑨ン ⑩涼しくなったら行きましよう。信号見に行きたいんでしよう ⑪ン ⑫信号 青いのと赤いのとあるでしよう ⑬ン ⑭音になったら進めって言うの。行ってもいいですよ。赤はね止まって下さい、行っちゃだめって言うの。ハッパって、赤いのがつくでしよう。そして、ブー、ブーがみんな赤いのだと止まるでしよう ⑮ン ⑯ブー ⑰そう止まるの ⑱ン ⑲あとで行きましようね、今はまだ暑いから(1歳4か月)

この子は信号を交差点に見に行くのが好きであったが、それにして母親の説明は、傍点の部分は音まね語で子ども向きとはいえず、教訓的でくわしい。

④教示的発言——全部の発言が教訓的であるが、以下の例はことばを教えているもの。傍点の部分。

・⑩バスと電車がのってるの(絵本)を持ってきて。そうそう、おりこうさんね、今度これ見ましよう、バス、バス、バス、⑪ン ⑫バス、バス、バス、⑬ブー。  
バスとブー(自動車)がまだ分化してないのである。  
・⑭あったは？ ⑮ター ⑯たーじゃない、「あった」よ ⑰ナーイ(ともに1歳1か月)  
発音ができないで「たー」になっている。「あった」は録音テープの回っている側を見て言い、逆を「ない」と言っていた。コント風のシーンである。  
子どもには、獲得した少ないことばを使って似たものを命名する

ことができる効果がある。「これはなんですか」「どうしたの？」「こんど読むの？」「もうねんねするの？」最後の二例は念押しである。次の例など、質問しているわけでもないのに疑問形を用いている。このような上昇調も多いのである。  
「そんなはだかんぼでどこ行くの？」「お口をパクパクしているの？」また、自分で質問して自分で答える自問自答の言い方も使って、子どもの関心をひくくともしている。「どっちのお手手に入っていますか、なーい」「こっちはなんでしようか、リスさん」などと使って楽しんでる。

このように、母親は繰り返しや疑問形を効果的に用いたり、できるだけ大きく口をあけて、発音明晰にわかりやすく話しかけるとともに、内容については、そのことばがあらわす場面(意味)を示しながら、ことばのみでなく行動もまじえて話していることがわかる。ことばを具体物と対応させながら、そのことばの文脈(状況)を示しながら、ことばの社会的用法を教えているのである。こうして、子どもは社会的に適用することばの意味を、ことばの使われる状況

「般用」という現象がある。男の人を見ると「パパ」と言ったりするのその例である。その他、同じ場面を使うことばでありながら立ち場によってちがう言い方になる。「ただいま」を「お帰り」の意で用いるなどの使用まぢがいは有名である(6)。これらの訂正も母親が行なって、社会に通用する語を習得させている。母子で絵本を見ながらの会話。

・①ワンワン ②それワンワンじゃないわよライオンよ。ライオンライオン ③ワンワン ④ワンワンみたいね ⑤ワンワンよりもね、もっと大きいワンワンよりも大きいのよ 会ったことないからワンワンなのね ⑥ワンワン ⑦ワンワン ⑧じゃないのよ(1歳6か月)

このころ、この幼児は熊やリスの絵もワンワンと言っていた。  
・⑨うまうまにしますよ ⑩ミー ムウ リー ルー ドウジ ヨ ドウジ ヨ ⑪手でどうぞぞ？ ⑫ドウジ ヨ ⑬どれにどうぞと言ってるの？ ⑭ドゥー ドウジ ヨ ⑮ちよっと待ってどうぞ ⑯ドウジ ヨ ⑰どれほしいの？ ⑱ドウジ ヨ ドウジ ヨ ⑲ちよっと待ってね 今ね もうすぐできるのよ ⑳ン ㉑「ちようだい」って言うのよ、「ちようだい」って言うのよ、「どうぞぞ」じゃなくて。はい、どうぞ(1歳6か月)

満2歳ごろまで、「ちようだい」と言えず、「どうぞ」と言う。母親が食物を与えるときのことばだったので、欲しいときをそう言えはよいと思つたようである。

⑤疑問文を用いる——以上は内容面に關してであるが、形式的には、繰り返しや疑問文を用いることが多い。疑問文は文末が上昇調なので子どもの注意をひくと同時に、親も、子どもの反応をたしかめる。  
を通過して、正しく学んでいくのである。就寝の時、昼に散歩に出かけた時のことを子どもに話すことは、ことばとイメージが一致して、子どものことばを豊かにする一方法なのである。1歳半の子の応答は「ン」に過ぎなくても、すばらしい栄養になっているのである。

・①椅子に腰かけていたら猫が来たじゃない、真黒い猫が ②ン ③ニャオンて、ニャオン、ニャオン ④ン ⑤ニャーンって言ったじゃない ⑥ン ⑦ね ⑧ン ⑨ン(もっと話せの意) ⑩それでバス見たわね ⑪ン ⑫バスも見て、電車も見たじゃない ⑬ン ⑭電車ゴーって言ったじゃない ⑮ン ⑯ン(もっと話せ) ⑰何？ ⑱ン ⑲それからオートバイも見たでしょ ⑳ン ㉑それから八百屋さんもいたじゃない ㉒ン ㉓まいどっていう八百屋さん ㉔ン ㉕それでドンドンドンンって帰って来たの ㉖ン ㉗ン(もっと話せ) ㉘信号見たでしょ ㉙ン ㉚信号 ㉛ン ㉜信号 ㉝ン ㉞青だったでしょ ㉟ン ㊱もうねむくなったんでしょ

中川久定著

# デイドロの『セネカ論』

初版と第2版とに表現された著者の意識の構造にかんする考察

A 5 判上製函入・六九四頁定価一三、五〇〇円

デイドロの『文学的遺書』であるセネカ論第二版と初版との異同を克明に分析し、デイドロの思想・生活感性の推移を解き明かす。現世で迫害をうけたソクラテスとセネカに自らを重ねあわせ「後世」への期待を繋ぐにいたるデイドロの姿を浮彫りする斬新な心理分析は、広く思想・文学・歴史研究の方法論に新たな寄与をもたらす。



岩波書店  
東京・千代田・一ツ橋2-5-5

幼児期を小学校入学までの時期とすると、約6年間という長い期間である。したがってことは教育も、幼児前期である3、4歳までと、幼児後期の5、6歳の年齢では異なってくる。大ざっぱに言うると、初期は、母国語のうちの日常生活語を習得する期間なので、母親はことばを習得しようとする幼児を助けて、日常生活でのものと対応の中で、経験させながらことばの意味を教えようと意図する。後期は、集団生活をはじめ、自分のことばで自分の行動の調節もできる(内言)ようになって、社会生活語も増え、大人の使う抽象語も使いたがるようになって、表現しようとする気持が旺盛になる。その時は、母親は聞き上手になって、子どもにことばを使う機会を十分に与えるようにしたい。友だちとのことば遊びも会話の好ましい経験の一つである。また、よい話を聞く機会を与え、もう大きくなったからと放っておかず、童話などを一緒に読みたい。ことばを正確に用いる注意も適宜与えるようにしたい。また、母子で会話をしたい年ごろなのである。

幼児期の話しことばを聞く、話す、話し合う活動が豊かであればあるほど、小学校に入ってから文字中心の生活も楽しく、豊かになるのである。決して別のものでなくつながっているのである。幼児期は話しことば教育に力を入れたと思う。その土台は、家庭なのであるから、家庭環境の一つである母親のことばを磨くことがすなわち、幼児の言語向上にもつながっていくのである。ことばを磨くことは形式を整えるというばかりではなく、全生活を豊かにしなければならぬのだということも忘れないようにしたい。

## 被差別部落の識字運動

——それが提起しているものは何か——

### 1 わが識字

「識字運動」「識字学校」とよぶ活動なり、そうした教育の場があるのだが、それはいったいどういうものなのか。まず、そこから始めるべきだろう。

ある被差別部落の母親は書いている。「私のなやみは学問とゆうことです」として。

「わたしがさんかんびにいくのに、かみをゆってもらいにいったら、おじいさんが、ねこにやるようなものだとい(っ)たことばが、びねにずしんと。くやし(か)った。これがさべつだとおもった。なすが、いっばいながれてとまらなかつたのです」

「いっは」「しき字学校がはじまってから」として。

「いっは」「いっは」みるみちなのかな。こんなくるしいことの、くりかえし「しき字学校」があるから、私にとってはささえにならんから、がんばってやらなくてはとおもい、なやみはしなくてはならぬとおもうほど、わからな

(1) 国立国語研究所創立30周年記念研究発表資料・大久保愛「幼児の語彙の発達——二幼児期の語彙の共通性と個別性」(昭和53・12・2)

(2) 大久保愛『幼児言語の発達』(東京堂出版、昭和42・11)

(3) D・スターン、岡村佳子訳『母子関係の発達——誕生から一八〇日——』(サイエンス社、昭和54・5)

言語生活351号 特集「育児とことば」(昭和56・3、筑摩書房) 野村庄吾『乳幼児の世界——こころの発達』(昭和55・12、岩波新書)その他がある。

(4) 国立国語研究所・言語教育研究部資料『幼児のことば資料

(1)——2歳・3歳誕生日のことばの記録——』『幼児のことば資料(2)——4歳誕生日のことばの記録——』(昭和56・6、秀英出版)

(5) Edited by K. Snow & C. Ferguson "Talking to Children — Language Input & Acquisition" (1977, Cambridge Univ. Press) などから窺われる。

(6) O・イェスネルセン、三宅鴻訳『言語——その本質・発達・起源——』(昭和56・4、岩波文庫)の第二部「子ども」では外国での般用の例が見られる。

(おおくばあ)・国立国語研究所言語教育研究部第一研究室長)

## 中村 拡三

くなるのです。こんなくりかえしなのです」

「識字」とは中国のことばであり、字をおぼえるという意味である。ここでその歴史をたどることはできないが、第一次大戦後、ロシア革命の影響をうけた知識人たちが「平民教育講演団」などを組織して文盲大衆の教育にあたる。一九二〇年ころからは陶行知たちによる識字運動がはじまる。抗日戦争の時期になると、子どもが親たちおとなに文字を教える「小先生」運動なども生まれる。それが一九三五年当時、わが国へも『生活学校』や『教育』を通して紹介され、注目されている(斎藤秋男「中国・識字運動の歴史」『解放教育』第一三三号、一九七二年)。

この運動は、わが国では忘れられていく。ただ、被差別部落大衆だけは、教育の機会をまったく奪われてきたが、自らの力で解放をかちとらなくてはならなかった。本格的な運動は一九二二年の全国水平社創立からはじまるのだが、さいしよはやはり中国と同じ道をたどる。京都・田中の「水平学校」(一九二五年)や、東京水平社の「プロレタリア学校」(一九三〇年)などが開かれて解放理論が学び